

# 会議概要

## 第1回策定委員会

開催日時	令和7年8月22日（金） 13:30～15:00
開催場所	南あわじ市役所 第2別館 第5会議室
出席者	〈委員〉健康増進及び食育推進計画策定委員会委員12名（3名欠席） 〈オブザーバー〉学校教育課主幹 〈事務局〉健康課長、地域包括支援室課長、健康課職員6名
議事要旨	<p><b>1. 開会</b> 市長代理として木田副市長よりあいさつを行った。</p> <p><b>委員委嘱</b> 委嘱状を交付 任期は令和9年3月31日まで</p> <p><b>2. 委員長・副委員長の選出について</b> 南あわじ市健康増進及び食育推進計画策定委員会条例第4条に基づき委員の互選により次のとおり選任した。 委員長：齊藤 雅文 委員 副委員長：登里 倭江 委員</p> <p><b>3. 南あわじ市健康増進計画及び食育推進計画（第3次）について（諮問）</b> 市長代理として木田副市長から、齊藤会長へ諮問を行った。</p> <p><b>4. 協議事項</b></p> <p>(1) 計画の概要について 事務局より、資料により説明。</p> <p>(2) 策定スケジュールについて 事務局より、資料により説明。</p> <p>(3) 市民向けアンケートについて 事務局より、資料により説明。</p> <p>(委員からの主な意見)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・質問の結果をどのように活用するかという点まで踏まえて検討を行う必要がある。単に実施するだけでは意味がなく、実際にどのように運用され、どのように施策へ反映されているかについても、確認・評価することが重要である。</li><li>・次の計画は長期計画となるため、中間評価を行い、必要に応じて中間見直しを行う必要がある。</li><li>・アンケート調査の内容については、非常に詳細に検討・共有されているが、いくつか気になる点があった。本アンケートは、過去の調査や既存の調査をベースにして構成されており、設問の形式や聞き方もそれに準じている。過去の調査と同様の聞き方を踏襲する意図は理解できるが、その前提を明確にした上で、必要に応じて内容の精査が求められる。</li><li>・13ページの「南あわじ市の自殺率は国や県に比べて高いことを知っていますか。」とい</li></ul>

う設問で、どの程度高いのかを示すとよいと思う。南あわじ市の自殺率は兵庫県全体と比較して、過去3年間いずれも倍近く高い水準で推移しており地域として深刻な状況にある。特に自殺率が高い層は、働き盛り世代以降の男性と高齢女性の2つである。この状況を踏まえ、次の設問では「この2つの層に自殺率が高いことについて、原因や対策、あるいは感想など、自由に感じたことを記載してください。」といった自由記述欄を設けることで、住民の声から具体的な課題や対策のヒントを得ることができる。現状の対策では十分に対応しきれていない部分もあるため、地域の実情に即した意見を集めることが重要である。

- ・自身がアンケートを受け取った場合、提出を見送る可能性がある。
- ・日頃から食生活に配慮して活動している人々にとっては当然の内容であり、特段説明を要するものではない。一方で、そうした意識のない層に向けて実施されている印象が強く、底辺を拾い上げる意図が感じられる。しかし、普段から食事が十分に取れていないような人々が、このアンケートに自発的に回答するとは考えにくく、内容の精査と工夫が必要である。対象者に対して、担当者が直接声をかけ、対話を通じて回答を促すような支援があれば、実施の可能性は高まるが、現状のままでは自身であっても回答をためらう可能性がある。
- ・生活習慣が最も重要である。特に食事、運動習慣や体型・体格の維持が鍵となる。アンケートには多くの項目が含まれているが、内容を絞り込むことで、より実効性のある調査が可能になると考える。生活習慣病の中でも、血圧・コレステロール・糖尿病の3点をコントロールするだけでも、健康寿命の向上に大きく寄与する。実際に、糖尿病患者の数は著しく増加しており、日々多数の患者対応が求められている。こうした現状を踏まえると、食育における課題も明確化されており、アンケートは目的を明確にしたうえで、重点を絞った設計が求められる。現状では、アンケートのためのアンケートという印象が否めず、調査の焦点を明確に定める必要がある。
- ・不必要な質問が含まれている印象もあり、項目の精査が必要である。
- ・設問数が多いと回収率が低くなる。もう少し焦点を絞る必要がある。
- ・一般の人が見た場合、設問の多さに戸惑う可能性があると考えられる。
- ・調査項目は、もっと単純であっても十分に意味を持つ。例えば「食事はきちんと取れていますか」「誰と食べていますか」「どんなものを食べていますか」といった質問だけでも、その人の生活状況が浮かび上がる。惣菜の利用頻度や家族との関係など、日常の食事から孤独や生活の質まで多くの情報が得られる。こうした情報は、自宅での様子も含めて、対象者の背景を理解するために重要である。
- ・アンケートにおいて全てのデータを抽出することは理想ではあるが、統計的には回答者の中から得られたデータによる比較にも一定の意味がある。アンケートとは本来そうした性質のものであり、一枚一枚配布・回収するのが最も確実であるが、現実的には困難である。したがって、過去の調査との比較を行うには、同様の手法を用いることが前提となるため、調査設計においてはその点を十分に検討する必要がある。
- ・アンケート対象が満20歳以上である場合、回答傾向として若年層の方が積極的に回答する可能性が高く、高齢者層の意見が十分に反映されない懸念がある。
- ・アンケート項目に主観的な表現が含まれると、回答者の個人的な解釈に左右され、正確

なデータが得られにくくなる。例えば「ゆっくりかんでいますか」「ゆっくり時間を取れていますか」といった曖昧な表現は、数値化が困難であり、客観性に欠けるため、より具体的かつ定量的な設問にすることが望ましい。

- ・援助を受けない人や医療機関を受診しない人の生活状況を改善する、いわゆるボトムアップの取り組みが最も重要であると考え、アンケート調査の手法ではその層へのアプローチが難しいのが現実である。とはいえ、アンケートとしてできる範囲での情報収集は意義があると思う。

(事務局)

今回ご検討いただいたアンケートについては、いただいたご意見を可能な限り内容に反映させる方針である。委員の皆様から、さらにご意見があれば、9月12日を目途に事務局までご提出いただきたい。いただいたご意見については速やかに検討し、修正した最終案をお送りします。最終案は書面にて了解をいただき、秋ごろにはアンケートを開始したいと考えています。

次回の検討は2月を予定しており、今回は、アンケート結果に基づく分析内容を提示し、協議をお願いしたいと考えています。